

野鳥たより

—北海道—

第 14 号

編集者 北海道野鳥愛護会
発行者 北海道国土緑化推進委員会
発行日 昭和48年5月
5月・8月・11月・2月 年4回発行



ホオジロガモ 網走市壽沸湖にて 昭和48年3月20日 撮影 萩 千賀 (12ページ参照)

カッコウの減少と生態系の破壊

井 上 元 則

1. 札幌附近のカッコウ

カッコウは札幌市のシンボル鳥であるが、今は札幌の中心街にはビルがたくさん建築され緑地が少なくなったせい、昔のように大通公園でカッコウの声を聞くことはまことに少ない。

私は若いとき北海道庁に勤めていたが、6月ごろ毎日のようにカッコウの鳴く声が植物園のあたりから聞えてきたものである。実際に札幌では、5月21日にはきまったように毎年カッコウの初鳴きを聞いたものである。戦前もこの日が官公吏の月給日なのだから、カッコウの声と私どもの生活が結びついていたようで、懐しい思い出の一つである。



原野のカッコウ (ヤチハンノキ) 1971. 6. 19

長かった北海道の寒い冬もいつしか去って、草の芽がそこかしこからふき出し、まわりの木立の新緑がひとしお目立ってくる5月21日ころ、北海道人にとって希望に満ちあふれているところで、そこに懐しいカッコウが訪れることは、「誰か故郷を思わざる」といいたい気分になるのである。

さて、カッコウは自分で巣をつくってヒナを育てないで、他鳥の巣に託卵してヒナを育ててもらうことが知られている。これは鳥同志相談して託卵するのではなく、本能的なものである。札幌や野幌附近で仮親となるのはオオヨシキリ、コヨシキリ、モズ、ホオジロ、アオジ、シマアオジ、ホオアカ、ハクセキレイ、ヒバリ、ノビタキ、クロツグミなどである。さてここで生態系と野鳥との関係について調べてみよう。

2. 生態系と野鳥

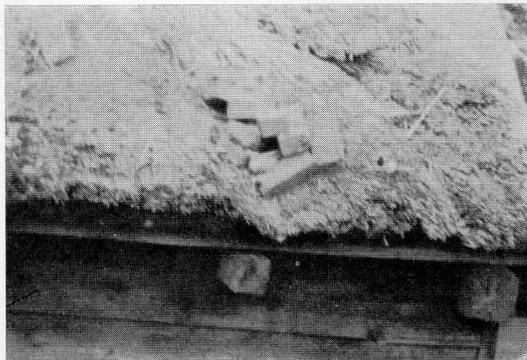
あるまとまった地域には、その環境に応じた植物群落が成立し、それに伴う動物相や微生物相が発達し、その生活空間を満たす無機的な自然とが形成している一つの系がある。そしてそれらの間の物質交代は一つの安定した循環の System をもっている。このようにある地域に生活する生物と無生物のすべてを総合して生態系

(Ecosystem) と呼んでいる。例えば沼は一つの生態系であり、沼をとりまく湿原地帯も一つの生態系である。またこれらは沼湿原地帯として一つの生態系をなしている。草原地帯につづく森林地帯も一つの生態系をなしている。したがって野鳥もまた生態系構成の1分子となっており、沼にはカモ、カワセミ、カイツブリなどが、湿原にはシマアオジ、オオヨシキリ、コヨシキリ、ハクセキレイ、シギなどが、草原地帯にはホオアカ、ヒバリ、ノビタキ、ウズラなど、低木林にはアオジ、ホオジロ、ベニマシコ、モズなど、森林地帯にはクロツグミ、アカハラ、オオルリなどが繁殖している。

6月初めごろ、カッコウは仮親のよく鳴いている附近を毎日偵察しながら、どの巣に自分の卵を託卵すべきかをねらっている。札幌や野幌附近で仮親となるのは、前記のうちオオヨシキリ、コヨシキリがいちばん多く、その次はモズ、アオジ、ハクセキレイ、ノビタキ、シマアオジ、ホオアカ、ホオジロ、ヒバリ、クロツグミなどである。

オオヨシキリはウグイス科の鳥で、湖畔、河川の岸に生えている草原、水田の畔あるいは湿原に生えているオニシモツケ、イタドリ、キタヨシなどの茎を2~3本集めて、これを柱とし、これに禾本科植物の枯草などを材料とし、地上1mぐらいのところにつぼ形の巣をつくっている。

今から4.50年前の札幌市は人口が20万人ぐらいで、北大附近の牧草地や桑園小学校附近にはオオヨシキリの巣はいくらでもあった。野幌周辺の厚別原野や大谷地方面の湿原にはキタヨシ、オニシモツケ、イタドリがびっしりはえていて、オオヨシキリやコヨシキリの繁殖に絶好の場所であった。また豊平川の土手や農家の納屋などにハクセキレイやキセキレイなども巣をつくっていた。い



農家の納屋の屋根に巣をつくったハクセキレイ
カッコウが託卵 1972. 7. 16

いかえればカッコウの仮親となる鳥たちの巣がたくさんあったのである。

かってドイツの Berlepsch 博士は鳥類を保護増殖するには、まず第1に鳥の好むものを豊富に供給してやること。第2には鳥の害敵を除いてやることだ。そして前者を二つに分け(1)営巣場を供給すること。(2)食餌及び水を豊富に供給することであるといったが、現在札幌市内に野鳥の繁殖に都合のよい生態系はいくら残っているのか考察してみよう。

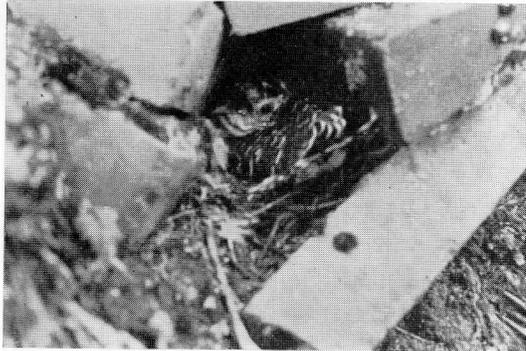
3. カッコウの減少した理由

札幌圏は戦後の復興とともに開発が著しく進み、沼や湿原は埋め立てられ、原野は開墾され、低木林は伐り払われた。続いて各地域に各種企業の団地や住宅団地や個人住宅がたくさん建築され、百万以上の大都市圏となったため、カッコウの仮親となる前記小鳥類の繁殖場所が著しく減ってしまった。

このようにカッコウは繁殖したくとも、仮親の巣がないので繁殖できないから札幌市への飛来が少なくなったのであろう。いわば札幌市に人間が百万人以上も集ってきて、カッコウの仮親の住みやすい生態系を破壊していることに気づいていただきたい。

4. 結 び

こんな調子では札幌市のシンボル鳥であるカッコウは年々減少してしまおう。それにつけてもわれわれは、このような自然の生態系破壊者たちの行為をだまっで見たいだろうか?。このへんで自然保護と野鳥愛護運動とが不可分の関係にあることを知るとともに、まず野鳥の生息しやすい緑をたくさんつくるため、市民総決起して緑化運動を展開すべきではなからうか。もちろん緑をふやすことは、公害の今日的課題である大気汚染を防ぐ上からも、きわめて重要であることは論をまたない。
(北海道栄養短大教授 農博)



ハクセキレイの巣にいるカッコウのヒナ 1972. 7. 16

3羽の越冬隊員

宮崎 政寛

今春もアオサギが帰ってきた。第1便は3月18日、次々に水禽類が北上し、昨年生を受けたものか、ひとまわり小さいのも混っている。いろいろの思い出を抱いて3羽の越冬隊員の待っているウトナイ湖に帰り着き、半年ぶりの再会をさぞ喜び合っていることであろう。

仲間を、また家族を残して南下して行った彼等は、どんなにか心残りであったことだろう。人間なら文明の粹を結集して越冬に備えるであろうが、彼等には何の準備も保障もない。それゆえにたいへんな冒険であり、英雄である。

湖面が氷結をはじめ、エサ場もどんどん少なくなり、12月24日の観察では埋立地の丘に立ち、吹雪にいためつけられ、いっそう哀れに見受けられた。正月4日、天候はうす曇り、風は痛いほど肌を刺す。わずかに残った水面、アシの蔭に1羽、直立不動でこちらを向いている。数少ないエサを守ってときどき水中に嘴を刺す。他の2羽はアシの蔭で見受けられない。この時期はよほどのことがないと飛び立たないようで、エサ場を懸命に守って

いる。

3月18日の第1便は24羽、吹雪をついての到着。21日には14羽、25日は22羽がそれぞれ観察され、同市明野のコロニーにはこの22羽が巣の上空を舞い、おり立ち、お互いに語り合い、小枝をくわえて補修をしているのも見られ、憎まれ小憎のカラスが5、6羽挑戦している。

本格的な巣作りは4月に入ってからであろうが、昨年30羽の確認であったのに28日は35羽がコロニーに飛来して翼を休めて愛を語り、越冬の辛さ、開発に追われ今後の見通しを憂慮しているかのようで、営巣条件が悪化しても30数羽の飛来を見ることができ、生命を賭け、コロニーを、エサ場を守っている。アオサギをこれ以上追いつめることなく、人間の愚かさを知り永久に保護してやらなければならない。

(3月31日 苫小牧市勇弘在任・鳥獣保護員)



帰ってきたアオサギ 苫小牧市明野にて 48. 3. 28

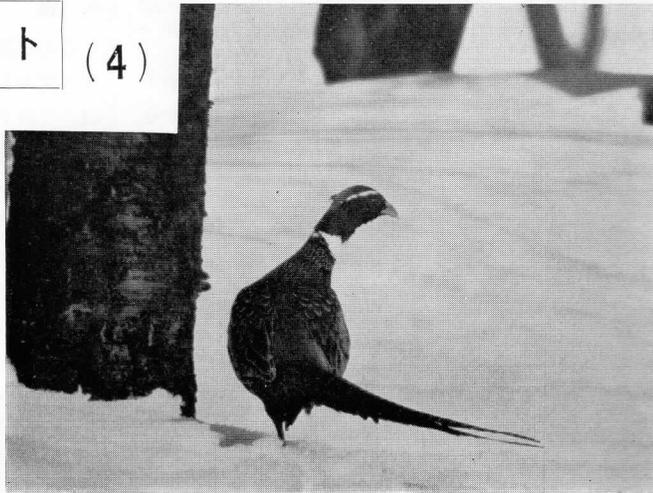
鳥のノート (4)

土屋文男

野鳥の写真を撮る

野鳥の写真を撮ることは、なかなか楽しいし、記録の面でも価値がある。本誌でも会員のすばらしい写真が、毎号を飾っている。また最近では、野生鳥獣の撮影記が単行本になるくらい盛んであるとも云える。

しかし、中にはウデもよいがカメラやレンズも特によいという場合もある。ちよつとした望遠レンズを一本買えば、十数万は軽く飛ぶから、一般的ではないし、超望遠や長焦点のレンズがないから、野鳥の姿など撮れぬと、最初から、きめこんでいる場合も多い。しかし、全国で有名な写真を撮っている方でも、何百ミリ以上という超望遠のレンズを持っていない場合もあることを最近知った。餌台を作って、そこにやって来る鳥たちを被写体にするなら、別に、ものものしいレンズなど不要である。しかし、庭に鳥を集めると云っても根気と少々の工夫は必要である。いわゆる標準レンズしかない場合は、餌台の一部に予めピントを合せておき、エア・レリーズのバルブをおして、シャッターを切る。これは市販されており、数メートルの長さの細いゴム管がついている。値段も数百円である。掲載のコウライキジの写真は、標準レンズにエア・レリーズをつけて撮ったもので、しかも夕方である。今年は藤の沢の小沢さんの白鳥園にお邪魔して、3回ほどキジやレンジャクの姿を狙った。しかし、同じ位置から写すので、バックも同一であるし、鳥たちの姿もあまり変化がない。1台のカメラを雪の上にセットして、遠くからシャッターを切ったのが、この写真である。最近では自動巻上げ装置のついた比較的安価なカメラも市販されているので利用でき



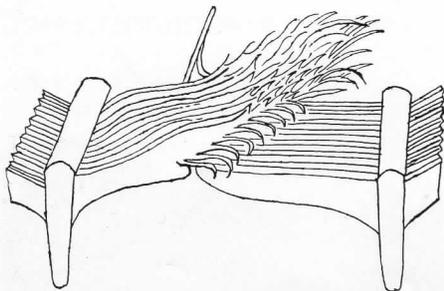
る。専門家の使用するモータードライブ装置など不要である。レンズの明るさは暗くなるが、手持ちのレンズを2倍～3倍に使用できるコンバータというものがあるので利用するとよい。数千円はしない。

鳥はナゾの多い生物

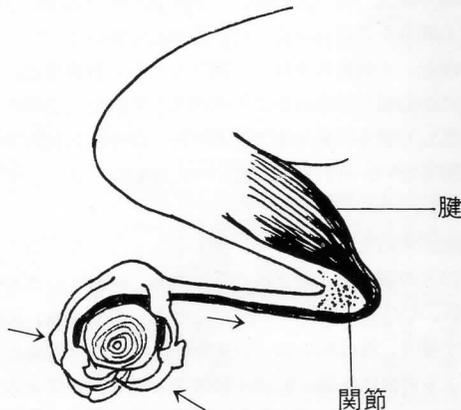
生物の生態は最近詳しく調査され究明されているが、鳥の生態など未だ判明していない点も多い。いわゆる「渡り」の本態など本当のところは判っていないし、専門の学者たちが明確に説明できないことが多い。

探鳥会などで眺めた鳥たちのナゾを、家に帰ってから調べてみるのも、おもしろい。鳥の羽根は1枚1枚バラバラなのに、なぜ飛べるのか?と、4月1日のウトナイ探鳥会ときのオジロワシの飛行を見て質問された会員の方のために、図を掲げておく。〔第1図〕

鳥の体を調べてみることは興味がある。睡眠中の鳥たちが枝から、ころげおちないのはなぜか?これは図を見ればおわかりだろう。〔第2図〕



第1図 鳥の小羽枝のカギ (羽の小羽枝のカギが相互にひっついて1枚の紙状になっている)



第2図 寝ている時の鳥の脚 (脚の腱は関節ごとピンと張られて、指を強くひっぱる。このため枝をしっかりとつかみ、睡眠中も落ちない)

自分のフィールドを持ちましょう

柳 沢 紀 夫

探鳥会に参加して指導者について歩くと、そのときはよくわかったつもりになっても、次に一人で出かけてみると前回と同じ鳥を見てもわからない、ということがよくあります。すっかり自分の知識になっていなかったわけで、とても残念な思いで帰宅することになります。

この残念さをたびたび味わうことがないようにするために、野鳥を見はじめた方、おぼえはじめた方々に一番すすめたいのは、自分の野鳥観察の場、自分のフィールドをお持ちなさい、ということです。

フィールドはできるだけ自分の生活地域に近いところが良いのです。列車とバスを乗りついで3時間もかかるというのでは意味が薄いのです。生活地域に近いところというのは、回数多くそこで鳥を見ることですし、またそうする必要があるので。裏に山があったり、川原が続いていれば最高ですが、歩いて約30分以内という場所が、毎朝出かけられる点が適当でしょう。近くに自然環境に恵まれた森林、草原・海岸などが無いからといってあきらめてしまうことはありません。水田や畑でも良いですし、給餌台を中心にした家の庭、通勤途中の道でも良いです。

フィールドでは、鳥がいたらよく見ることです。出てきた鳥に好き嫌いなど言わずに何でも良く見ます。はじめのうちはいろいろわからないことがあります、くりかえし見ているうちにわかってくることも少なくありません。それでも疑問の点は探鳥会のときなどにくわし

い人にたずねればよいのです。別な見方や意見があることがわかり簡単に問題が解けてしまうことがよくあります。

しばらくするうちにはその季節・その場所にどんな種類がいるとか、何羽ぐらいいるとかということがわかってきます。そうなればしめたもの、何か異った種類が来た場合でもいつもの鳥ではないことがわかり、それをよく見ることで新しいレポーターが増えるのです。

自分のフィールドを持つと鳥の種類がわかるようになるばかりでなく、鳥の動作や鳥の移動（渡り）の季節、繁殖の時期などもわかってきます。そのうえ、もっと大きな点、周囲の自然環境の季節による変化などにも目が開けてきます。このような、自分の中に蓄積された身体でおぼえた得難い知識は、自然を正確にとらえる目を養ってくれますし、他所での鳥や自然の話が出たときに自分のフィールドと比較でき、直接他所の鳥や自然を見聞きしなくても自分の知識として容易にとり入れることができるのです。

鳥とつきあう時間を毎日少しずつでもよいから持つ、毎週少しずつでもよいから持つ、前に見た鳥を忘れてしまわないうちに再度見るということで、鳥をおぼえようということになったら、くりかえしくりかえし鳥を見るというのが上達の秘訣と言えるでしょう。

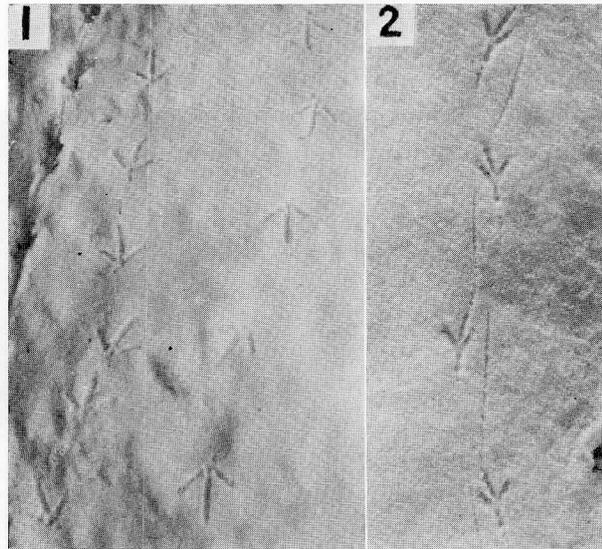
(日本鳥類保護連盟・東京在住)

《クイズ》

道ばたでハシブトガラスがなにか餌をあさっていました。近よるとカラスは逃げましたが、そこにはカラスの足跡のほか、もう1種別の鳥の足跡がありました。キジ（コウライキジ）の足跡です。写真はそれをうつしたのですが、さてどちらがカラスで、どちらがキジでしょうか。

(藤巻裕蔵)

(答は12ページにあります)



続 キレンジャク

新 宮 康 生

この冬も我家の庭にはスズメをはじめとし、シジュウカラ、ムクドリ、ヒヨドリ、シメ、ツグミ、アカゲラ等が訪れ、それにイスカ、ベニヒワも加わって一段と色彩を増した。

暮も押し詰った12月29日の朝、待望のキレンジャクの1群約20羽がほんの数分間立寄った。美しい声と元気な姿を見て何かホットしたような気持になった。この冬は最初のうちは雪が少なく、時々30羽くらいが姿を見せるだけだったが、1月の中旬を過ぎて積雪が増えると毎日やって来るようになった。昨年は5,60羽から多くて100羽くらいであったが、今年は1ヶ月も早く、数もはじめの頃は5,60羽だったのが、2月に入ると100羽から200羽くらい、最高は300羽以上も数えた。

餌は最初リンゴだけだったが、ナンヤバナナも良く食べ、3月に入ってからはパンも非常に好むことがわかった。このくらいの数になると、餌の消費量も相当なもので、1日にリンゴを4,50個とパンの耳3,40枚をたいらげた。勤めの帰りにこれを集めるのが一仕事であった。彼等のマナーや行動については「野鳥だより」第10号に記したが、今年はこの他に2・3気付いたことがあるので記して見たい。

このくらい集まると中には色々変わったのがいる。先ずヒレンジャク。昨年も3月の末から4月にかけて2羽が確認されたが、今年は3月の中旬から3羽見られるようになった。胸から腹にかけてのクリーム色と尾羽の先端の緋色は特に印象だ。次に怪我鳥、何にやられたのか右足を失ったのが1羽いた。枝や餌台に停まるときの動作が不安定だが、他の連中と一緒にになってセッセと食べて

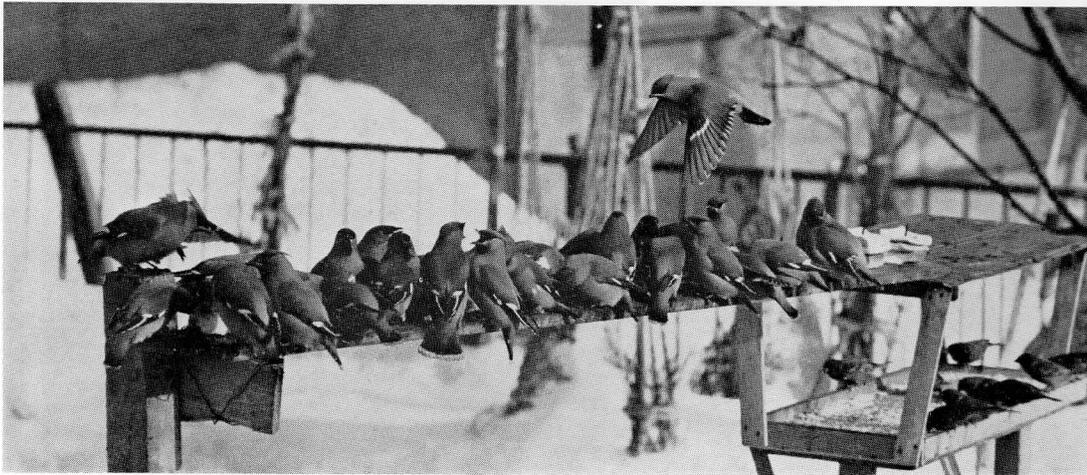
元気だった。又体中の羽毛がヨレヨレのが2羽見られた。タカかハヤブサにでもやられたのか見るも気の毒な姿だったが、夕方遅く迄食べていた。ヨレヨレ連中が最後まで残って食べていると、これまた一際大きく立派なのが4・5羽くらい近くの木にとまって見守り、一緒にどこかへ帰って行く温かい風景が何回も見られた。

同じ怪我鳥でも食事に来て怪我をするアワテ者も5・6羽いた。その一つは冬囲いの根曲竹やリンゴを吊す針金にハサマッテ動けなくなってしまった連中で、外してやるとすぐに飛べるのもいたが、中には羽根や皮膚に傷をつけ、血だらけになって全然飛ばず、我家の鳥籠で数日療養生活を送って帰ったのもいた。また食事中に何かに驚いて一斉に飛立ったトタンにガラス窓にブツカッテ脳震盪を起し、飛べなくなってこれまた休養をとって帰ったのもいた。この中の1羽にマジックインクで印をつけて放したらその後数日間やって来るのが確認された。怪我鳥を手にしてわかったことであるが、皆かなり気の強い連中で、指を出すと、ツヤのある真黒な嘴でツツイたりクワエタリした。籠の中に入れると半日くらいでリンゴやパンズを食べるようになった。

手にとまらせて、これを上下左右に動かすと、首が伸びたり、縮んだり、右や左に傾くだけで、頭は空間の一点にとまって動かない。飛ぶ機能と関係ありそうだが、一体何がこの頭をコントロールしているのだろうか？どの鳥も同じだろうか？

3月18日に近くに駐めてあった車のガラスにブツカッテ事故死が1羽出ってしまった。

できるだけ注意はしていたのだが――





毎日彼等の群を見ていると羽根の紋様にそれぞれ個体差のあることがわかる。尾羽根先端の黄色の巾の大小、色の濃淡、次列風切の先にある赤いワックス状の多少(3~7本)、初列風切羽根の白と黄色の紋様の多少等

1羽1羽よく見ると皆違っている。それぞれの個性だろうし、又老若の差でもあるらしい。一際大きいのは紋様も大きく色も鮮かである。

3月中旬になって雪どけが進み道路に水溜りができると彼等の中に水浴をするのが出てきた。あまりきれいでない水溜りの中に入替り立替り入って、スズメと同じように水浴をしては近くの木で羽づくろいをしていた。

昨年は4月23日を最後に姿を見せなくなったが、今年はいつまでいてくれるだろうか?いま来ている鳥たちがまた来年も忘れずに我家の庭に訪れてくるのだろうか?

来たときに較べて皆一廻り大きくなり、羽根の色つやも良くなったように思う。

腹一杯に食べて、皆そろって元気にシベリヤに旅立ってもらいたいと思う。

(4月8日記) (札幌市白石区北郷在住)

餌台の野鳥

入江 義智

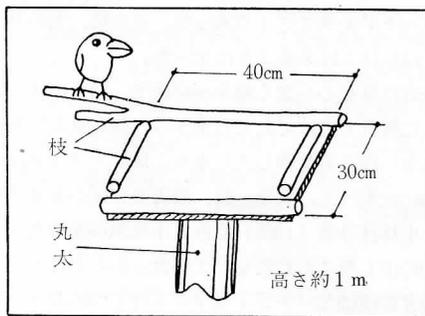
私が自宅の庭に餌台を設けたのは今年の2月初めである。今年の1月中旬ごろ、近所の家で干していたトウモロコシを数羽のイスカが啄みに来たのを見て、我が家にもトウモロコシなどを置いておけば来るかもしれないなどと期待をもったのが、私が餌台を作りはじめたきっかけである。それから私は本などを頼りに右図のような餌台を作ってみた。

自宅前のわずかな庭に備えつけたもので、最初は野鳥が来るかどうか疑問だったが、それでも餌台を備えつけてからこれまでに、思ったより多くの野鳥たちが私の家の餌台を訪れた。やはり野鳥たちにとって冬期の食糧難はたいへんなことなのだろう。

以下、私の家の餌台を訪れた野鳥たちを紹介しよう。

キレンジャク

この鳥はほとんどの人が顔なじみだろう。最初に私の家の餌台を訪れたのは餌台を備えつけてから5日くらい経った日で、それから毎日、朝方と夕方に1~30羽くらい訪れるようになった。黒メガネに冠毛のアクセサリーと、じつに紳士的な感じであるが、私の見るキレンジャクは餌台にあるリンゴをあっという間に皮だけにしてしまったり、執拗にウソやスズメや仲間のキレンジャクを追いかけてリンゴを1人じめにしたりして、とても紳士の感じはない。餌台でのキレンジャクの食欲はじつにすごいもので、1度に30羽も来ると、10分とたたないうちにリンゴ1個が芯と皮だけになってしまう。

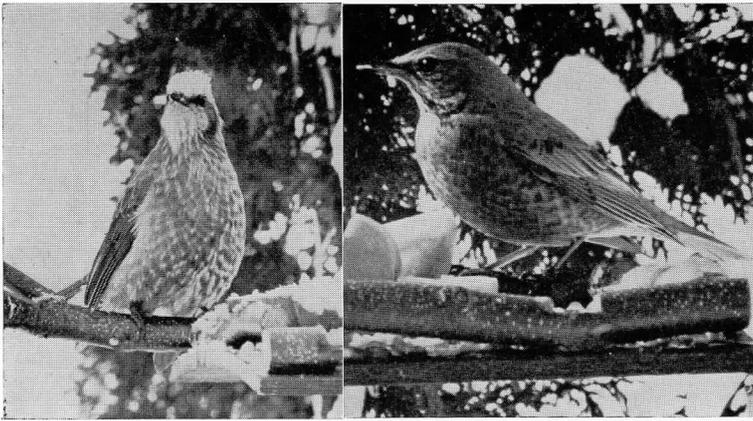


餌台の略図

キレンジャクの群が訪れた日の夕方など、餌台を見ると皮だけになったリンゴが残っている。それを見ると、その食欲にいまさらながら驚く。それは冬の間、必死に餓えをしのいでいるキレンジャクの生きる姿に他ならない。

ヒヨドリ

陽の光が雪に反射してまぶしく感じる朝、積もった雪を掻き分けて餌台に餌を置きに行くと「ピーヨ、ピーヨ」と鋭い鳴き声をよく聞く。最初は警戒心の強いヒヨドリのことだから、こんなケチな餌台なんかに来てくれないものと思っていたが、餌台を備えつけてから5日くらいたった日にパンやリンゴを食べにきたのを見て我れながらこの餌台に感心してしまった。ヒヨドリの大好物は砂糖水に浸したパンで、これを置いておくと、すぐに飛んできては、次々にパンを鵜呑みにして食べて



ヒヨドリ

ハチジョウツグミ

しまう。

地味な色をしてあまりパツとしないヒヨドリだが、私の餌台にはかかせぬ来客の一人である。

ハチジョウツグミ

餌台を備えつけた日の翌日のことだ。なにげなしにカーテンのすき間から餌台を覗いてみると、見慣れない鳥が1羽、リンゴを啄んでいた。「餌台を備えつけて早々の珍鳥？、我が餌台もたいしたものだ。」などと心おどらせながら図鑑で調べてみると、冬期、我が国に少数渡来するハチジョウツグミであった。その後、雪の積った朝などはしばしば来るようになった。

この鳥は警戒心が強く動きが機敏で、餌台に来てもちっとした物音で逃げだしてしまうし、餌を啄んでも30秒とたたない内に姿を消してしまう。体はツグミとほぼ同じくらい。肩はん、腹部、脇、腹側及び尾が赤さび色を呈し、小林桂介著(1965)原色日本鳥類図鑑の色よりも全体的に少し黒ずんだ色をしていた。からだはスマートで、動きの機敏なハチジョウツグミはじつにシャープな感じであった。

これらの野鳥のほかに私の家の餌台を訪れた野鳥は、スズメ、ツグミ、ウソ、シジュウカラ、ムクドリ、アカゲラなどである。

参考のために餌台を訪れた野鳥の食性を示した表と、私の家の餌台における野鳥たちの力関係の順位を示した表を挙げておこう。(表1、2)

ところで、ここで問題となるのは、餌台を設けることがよいことか悪いことかということである。ちなみに私の意見を少し述べてみる。結論から言えば、餌台を設けることはよいことだと思う。去る2月に催された本会の座談会で餌台の問題として、餌台に集まった小鳥がタカなどに襲われるということが発表された。これは自然界の食物連鎖そのものであり、タカに襲われる小鳥の数が、たとえかなりの数に及んだとしても、餌台があることにより冬の間、餓をまぬがれることができる野鳥の数

全体から見れば驚く程の数ではないであろう。それにタカなどがどこの餌台にも現われるとは限らない。

もう一つの問題は、野鳥を餌台などで餌づけしてよいものだろうかという疑問である。

私もこのことについては疑問を持つ。やはり野鳥は完全に野生の状態であるのが自然なのだ。しかし、今日自然環境はいたるところで破壊され、野鳥たちはその数を年々減らされている。まして、冬期間の食糧難で

は野鳥たちも安心できないだろうから、餌台などを設けて、できるだけ野鳥たちの食糧難を解決してやることはよいことであると思うのである。

このほかに餌台を設けることにいろいろな問題があるにしろ、反面、餌台によりごく近かで野鳥を観察したり写真撮影ができる利点もあり、私は餌台を設けることはよいことであると思う。

最近、「人間優先」という言葉のもとに、自然環境の破壊が進められている。各地の観光道路建設などはそのよい例である。このように人間だけの利益のために自然が無視され、森林や原野が潰されれば、野鳥の姿は急速に消えていき、やがては人間の健康までもむしばまれるのである。

今、道南では、苫小牧市周辺の開発が急速に進み、広大な勇払原野がなくなろうとしているが、この原野に渡って来る水鳥やアオサギたちは一体どこをねぐらにすればよいのだろうか。(4月10日)(千歳高校1年)

表1

野鳥たちの順位(強い方>弱い方)

ヒヨドリ>ツグミ>キレンジャク>ウソ>スズメ>シジュウカラ

表2 野鳥たちの食性(◎よく食べる ○食べる)

餌の種類	パ	あ	ヒマワリ	リ	あ	チ	す	とうもろ	ミ	バ
鳥名	ン	わ	米	の	ゴ	ら	餌	こ	カ	タ
	ン	わ	種子	ゴ	み	み	み	し	ン	ー
スズメ	◎	◎	◎	○	○	○	◎	○	○	○
ヒヨドリ	◎			◎	○					○
キレンジャク	○			◎						
ツグミ	◎			◎						
ハチジョウツグミ	◎			◎	○					
ウソ		○		◎			○	○		
シジュウカラ	○		◎		◎				○	◎

野鳥のまち作り

川村芳次

私は野鳥愛護会にお仲間入りのできたことを心から喜んでいる。これからいろいろとお教をいただきたいと思っていた矢先、「何か書け」との仰せつけがあり実は当惑したが、私は野鳥にかける夢もっているの、思い切って諸先輩の前に不躰けにこれを披瀝してご指導を仰ぐことにした。

結論から申し上げますと、私は私の住む岩見沢を野鳥の住むまち、つまり野鳥のまち作りを成し遂げたい念願を抱いている。ということは、今日のようなセカセカした世相に処して如何に対応するかは、いろいろの角度から最善を尽すべきであり、すでにいろいろやっではいるが、私はその一つとして、例えば北欧で見えるような可愛い野鳥を呼んで楽しい雰囲気環境をつくって、情操豊かな気分ひたるようにしたい。これが永年にわたる私の夢である。

こうした理想の実現は一朝一夕のことではなく、さしづめ地域住民の理解と協力がなくてはならないことは言うまでもないところであるが、先ずその前に野鳥と岩見沢のまちとのかかわり合いがどんなふうなものかを、私の持つきわめて乏しい経験ではあるが、この可能性を自信づけてくれるように感ずるので、今回は主としてそのことを述べてみたい。

岩見沢には都心から南方2キロ余のところ約400ヘクタールに及ぶ広大な国有の原生林がある。2年前に休養林に指定されたが、今後も現状を変えることなく保存されることになっている。

この国有林には数百種にも及ぶ自然科学上貴重な草木があるほか、通年住みついているキジなど、また季節的に渡来する多数の野鳥がおり、これらの野鳥は鳥獣保護区として保護されているので安心して生息している。

このような野鳥の楽園を源泉の基地として、全市におびき出して発展させて行くならば、施策よろしきを得ば期せずして野鳥のまち作りがうまく行くのではなからうかというのが大筋の考え方である。

私は野鳥のまち作りについての可能性を考える卑近な事例をここに詳しにし参考に資したいと思う。それは我が家のまわりに起きた野鳥の動きを見て、仕向け方よろしきを得ば必ずや成果をあげ得るように感を深くした次第である。

私はこうした事実を披瀝する前に、宅の周辺環境についてちょっと触れておくことにする。敷地はせいぜい300坪くらいだがオンコ、雑木などで住家は囲まれており、裏手には幾春別川があって堤防には大きな雑木が流

れに沿って数十本ある。

さて、庭の野鳥のようすであるが、春から秋にかけて十数種もの鳥が姿を見せ、さえずる声を聞かせてくれるが、この間に起った動静の二、三を申し上げてみたい。

(1) 家の北側の隣家との境界にあるカラマツの下枝に何か動いているものがあることをトイレの窓から発見し、確かめたところキジバトの巣であった。

(2) 表通りは自動車や人通りの繁しい道路であるが、道際の松の枝に小さな野鳥の巣が営まれた。

(3) 夏の夜中のことであるが、2階の天井裏で突然ガサガサ、パタパタと時ならぬ物音が起った。何かと近所の若い衆をわずらわして確めたところ、野鳥のヒナ鳥が巣立つ羽ならしとわかり、ほっとしたことがある。

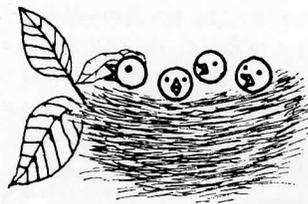
(4) これは一昨年夏のことであるが、庭石を裏庭に入れた際、石の上がくぼんでいるので、野鳥の水飲み場にしようとして庭師の智慧で溜水をすることにした。約10日くらい経ってから毎日のように集まるようになったが、朝夕水の補給ごとに浮いている羽毛を見、幾種類かのものであることを知った。

(5) 一昨秋(9月25日)夕刻、例によって水の補給で裏庭に行ったところ、大きなオンコの下に大きな鳥の糞が落ちていたのに気づき、何気なく上枝を見たところ、円い大きな目玉を光らせているものがある。直感ではネコのようにであったが、実はフクロウであった。早速写真機を持出して写したが、夕暮と枝影とで残念ながらものにならなかった。おそらく日中ずっとくつろいでいたに違いない。

以上のような事実によって、積極的に鳥の好む実なる木などを植えたり、水飲み場などを作っておびき寄せる方途を講ずるならば、野鳥のまち作りの夢も案外実を結ぶのではなからうかと、ひそかに考えている次第である。

近く識者や同好の士の意見をたたき、成案を得たいと思っているが、どうか先輩各位におかれても何分のご批判、ご指導を願うことができればこの上ない幸である。

(岩見沢市在住)



早春賦

高橋明雄

樹園地の早春は、オレンジがかかったミルク色の曙にはじまる。

4時50分、防風林からハンプトガラスの親しみ深い第一声。それを合図に起きだした人々が、耕耘機を手入れし樹皮削作業を開始する。

ムクドリが日毎に増えていく。この連中の先発隊らしき一群をみたのは3月13日の早朝で、市街地に近い西曉寺の本堂の屋根だった。

1973年4月7日の探鳥では、暑寒沢のリンゴ園を約50

分歩き廻る間、25、66、13、32、15、74、22羽の群を目撃した。防風林や電線にとまって群れているのは、まだ彼等が渡ってきて間もないこと、家屋や倉庫の近くで、ゴミや腐果を漁らねばならないからであろう。

2月下旬になって降った雪は、まだ相当の残雪となつて、樹園地を白のかったまだらにしている。旺盛な食欲を満すのも容易な仕事ではあるまい。例年より10日は遅れているという。

そういえば増毛ではめづらしく、オオハクチョウが1月29日に信砂川へ舞いおり、2月1日には再び飛び去っていった。

たった1羽、どうしたというのであろう。やはり気候の異変に由来するのでもあろうか。

次第に水音の高くなる川畔を歩き、ハクセキレイ、カラヒワなどのさざめきに春の訪れを知るのである。

(増毛町在住)



森の通信手

ツンバソフ

森の中は静かで、雪がとけてポタポタ落ちる音、小川が目覚め水の下で気泡をころがす音が聞こえるほどでした。

キツツキが飛んできてせわしくコツ、ツコツコとたたきました。あまり熱心にたたいたので木がうなり声をだすほどでした。

キツツキがコツ、コツコツ、コツコツとたたいて合図すると、これはトン、ツー、ツーです。

そうです、この電信符号は「は」です。トンは「る」トントントンは「が」、ツートンは「き」、トンツーは「た」です。

はるがきた!と知らせたのはキツツキでした。

ほかのキツツキが飛んできて、その通信手を追いたてると、同じようにたたきはじめました。トンツーツーは「は」、トンは「る」……です。

そしてこのキツツキも「はるがきた!」という電信をうったのです。

(訳: 藤巻裕蔵)

鳥の
保護の本

『鳥のいるけしき』

文と絵 中村登流

冬の間、窓の外につらしたリンゴと牛脂にやってくるヒヨドリ、アカゲラ、シジュウカラなどを毎日見ていると、誰しもこれらの鳥に次第に愛着をおぼえるようになるだろう。これがその鳥のことをもっとよく知りたいと思う第一歩となる。

著者の中村さんは、長年鳥の生態を調べている研究者である。この本には、中村さんの観察ノートの中の記録にもとづいて、いろいろの鳥の生活のひとこまがえがかれている。主人公の鳥は身近なスズメやムクドリなどであり、しかもえがかれている情景はそれほど特別のことではなく、よく注意してないと見すごしてしまいそうなことである。それでもじっと見つめてい

ると、興味つきない「鳥のいるけしき」となる。ここから自然を科学的に見つめようとする心が生まれるのではないだろうか。

ある鳥のことを本当に知ろうとするには、いろいろの本からこまぎれの知識を頭につめこむのではなく、その鳥を自分の目でじっと見つめることが出発点となることを、この本が教えてくれる。「小学校中級向き」となっているが鳥のことを知ろうとする「大人向き」の本でもある。(大日本図書、580円)。

なお、同じ著者の「小学上級～中学生向き」の本に「森のひびき——わたしと小鳥との対話」がある。エナガを観察して群の形成や繁殖行動などを記録し、考察したもので、やはり野外で行動する科学者の目と鳥に対するあたたかい心の感じられる好著である。

(大日本図書ジュニアブックス、580円)

コクガンの観察

森口和明

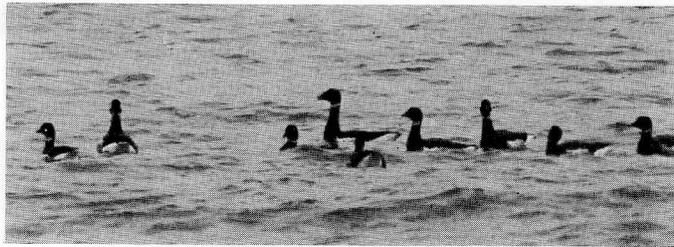
種名 コクガン (黒色型)

場所 函館湾

観察日及び数 昭和48年2月11日 17羽

〃 2月21日 11羽

〃 3月28日 11羽



観察状況

スコープで観察しましたが、2月11日・18日は沖合約500m～100mくらいで3月28日は短い時間ですが40mほどで観察することができました。皆一群となって行動し採餌のときには次第に近づき逆立ちして海藻

を食べながら更に岸に接近して来ました。頸輪の殆どない幼鳥が1羽みられました。以後の行動は不明、スライド・プリントで写真をとりましたが一枚送ります。以上お知らせします。(函館湾鳥類センサスの一部より)

(函館市在住)

沼の氷も急速にとけはじめ本格的春となりましたが、駒ヶ岳を背景とした小沼を中心に集まる鳥たちを紹介します。なおこれは今年の1月から4月4日まで15回の調査によるものです。

1 沼を舞台とする鳥たち

ワシタカ科……わしは自然界の頂点の鳥だと黄色い大きな嘴をみせて人を近づけない2羽の幼鳥オオワシ・首から頭にかけて太陽の光を受けて金色に輝かせ、真白い尾の成鳥3羽と大きさだけ一人前の7羽の幼鳥オジロワシ・トビに似たノスリ。

サキ科……たった1日観察させてくれ、寒そうに片脚で立っている3羽のアオサギ。

ガンカモ科……大勢の人々を喜ばせ或は心配させた83羽のオオハクチョウ・いつも寝てばかりで20日余滞在して姿を消した幼鳥のマガン・昼寝の多いマガモ・オオハクチョウの餌のエンバクをひしめき合っているカルガモ・昼寝からさめるとあちこち飛び回って着かぬコガモ・きれいな腰みのをつけて雌雄たった2羽でやって来たヨシガモ・頭がはげたかと思わせるヒドリガモ・いつもスクラム組んで団結しているホシハジロ・白いネクタイをし長い尾を持ちながら逆立ちして食事をしているオナガガモ・女学生のように髪を後にたらししたキンクロハジロ、またその中の1羽は髪はバサバサ油けなく色気もなくその上パンを食べる現代ッ子・キンクロハジロとそっくり、おまけに混群で湖底調査をし、遠くから観察している鳥キチをなやますズガモ・おでこの頭を後へカクン、ルンパを踊るホオジロガモ・白いかわいい水着でちょろちょろ泳ぎ回るミコアイサ・2回姿をみせてさっさと立ち去ったウミアイサ・遠くからでもわかる大きな白いエプロ

ンをみせびらかして泳ぐカワアイサ。

カイツブリ科……カモの仲間からはずされて怒ったのか顔に白い入墨をして、翼を忘れて来たようなかっこうで3月28日に現れ、4月4日には39羽のカイツブリ。岸边でポチャンポチャンと潜っています。

以上が沼の舞台に登場したメンバーです。

2 沼の周囲の鳥たち

とんきょうな声で寝ている木をやかましく診察するアカゲラ、オオアカゲラ・もっともらしい顔して静かにたたくコゲラ、コアカゲラ・地球が円いことを忘れて木の丸さと長さを測っているゴジュウカラ・忙しそうなキバシリ・真黒い顔したセグロセキレイ・顔におしろいをつけたハクセキレイ・借金でピーピーのヒヨドリ・ときどき木からおりて雪のない場所でもそもそやっているツグミ・鳴かずばわかるめえと黒い帽子のコガラ、ハンブトガラ・とさかと帯とを見せ合うヒガラ・シジュウカラ、たった1羽のホオジロ・草の実をくわえてポーズをとりカラーズライドで撮らせてくれた3羽のウソ・のど自慢鐘一つのムクドリ、カケス・ちよっと変わった2羽のジョウビタキ・多くて悩みの種のハンブトガラス、ハンボトガラス・勇敢にもオジロワシを追って餌をとりあげ、すぐガラスにとり

あげられたトビ・人間と縁の切れないスズメ・頸輪の鮮やかなコウライキジ。

以上が沼周辺の鳥たちです。

この地域の沼は栄養に富んだ沼ですが、今では逆に汚染の沼となりつつあります。いつまでも鳥の集まる場所であってほしいものです。(大沼における鳥類センサスの中より) (函館市在住・鳥獣保護員)

森口和明

冬の大沼公園の鳥たち

庭の小鳥 わが家を小鳥の楽園に

— 土屋副会長が出版 —

本会副会長の土屋文男先生がこんど鶴書房から表記の本を出版されたので紹介します。

この本を書かれた動機と内容については、先生がまえがきで記しておられるように「野鳥の保護の問題に加えて、野鳥たちと仲よくなるためには、どのように考え、どのようにしたらよいかを述べてみたものです。(中略)マチ造りが進展しても、美しい並木がつけられ、都市の中心部にも緑が残され、人々の鳥たちへの暖い目が彼等に理解されたとき、ヨーロッパ並みの環境が出現するものと信じています。」ということです。

全巻は4章で構成され、第1章(人と鳥たち)では愛

鳥ということの意味や野鳥保護の歴史が、第2章(野鳥の生態)では鳥の分布や生活、渡りなど鳥学的事実と代表的な日本の鳥のプロフィールが、第3章(庭に野鳥を)では野鳥を庭に呼ぶテクニック等が、第4章(鳥との交わり)では探鳥会の装備や図鑑、レコード等の紹介など、豊富な内容がたいへんやさしい文章でいねいに書かれています。たとえば第4章では、鳥に関する民芸品や情報整理の方法としてのカードシステムにいたるまで含まれています。博識多才な先生の面目躍如たる本といえましょう。 鶴書房刊 新書版 240ページ 480円

私設・野幌森林公園探鳥散歩

野幌森林公園を少人数でのんびり歩いて、鳥や虫や花を眺めています。おひまな方はどうぞおいでください。

◇月日 6月9～10日、7月1日

◇集合時間その他は未定です。同行される方は下記連絡先までご照会ください。6月は夜歩きたいと思っています。

◇連絡先 百武 充

TEL江別(01138) 6-4008(夜だけ)

ホオジロガモの求愛行動(1ページ写真)

カモ類は冬の間につがいをつくりませんが、オスがメスに対して行なう求愛行動(コートシップ・ディスプレイ)には、様式化されたさまざまなタイプがあり、カモの種類によってきまった行動をとります。

この写真のホオジロガモは2羽ともオスですが、右方の個体が頭を高くあげ、嘴を上に向けているのも求愛行動のひとつです。この行動の衝動がさらに強くなると、頭をもっと背中にひきつけ、尾をあげて尾羽を開いてみせたりします。

クイズの答 (問題は5ページ)

1はキジ、2はハンプトガラスです。キジは足を交互に動かして歩きますが、片方の足はもう片方の足の前につきます。前の3本の指は大きく開き、後の指は非常に短いので跡がほとんどつきません。カラスは両足をそろえてとびはねたり、交互に動かして歩きます。指は大きく開かず、後の指の跡が長くはつきりつきます。片方の足をもう片方の足のななめ前につくので、足跡は2列になります。

《事務局だより》

☆ 街かどの小さな空地にも、田園の細い径の傍にもタンポポの鮮やかな黄色がめだつようになりました。春はいかにも北地の春らしく駆け足でやってきたようです。愛鳥週間を迎えて、野鳥だより14号をお届けします。早いものでわたしたちの会も、もう創立3周年になりました。このへんでいままでの活動をふり振り返り、これからの展望を考えたいところです。

☆ 今号は原稿整理のため「鳥の記録」と「窓」を休みました。ヒバリの初認など鳥の記録をたくさんお寄せいただいておりますが、これは15号で夏鳥のたよりと一緒に掲載いたします。ヒバリやアオジ、カッコウなどの夏鳥の初認、ツグミなどの冬鳥の終認、珍

しい鳥の出現記録などの情報をお待ちしています。

☆ 13号の小川さんの鳥類相調査の呼びかけ、11号の松岡さんのクマガラの情報あつめ、ともに応えてくださった方が非常に少ないということです。やってみようという方、クマガラをみたことのある方はどうぞ遠慮せずに連絡されますように。

☆ 13号3ページに記した日本野鳥の会発行の野外観察用ハンドブック・山野の鳥、事務局の取次を一応打ち切りましたのでご承知ください。

☆ 原稿をお寄せください。送り先は事務局(道庁自然保護課内:札幌市中央区北3条西6丁目、TEL 231-4111 内線 3895)まで。6月25日までにいただければ15号に間にありますが、都合により16号以下にまわす場合もあることをご承知ください。